

アメリカ合衆国におけるフェミニスト・セラピー／ カウンセリングの歴史と社会運動への参加

相方 未来

はじめに

日本ではフェミニストカウンセリングという呼び名で知られるフェミニスト・セラピーは、1960年代末のアメリカ合衆国で第二波フェミニズムから派生した¹⁾。フェミニスト・セラピーが確立する以前の伝統的な心理療法では、女性のクライアントたちの抱える問題は個人に帰する問題とみなされていた。これに対して異議を申し立てたのが第二波フェミニズム運動を経験した、精神保健に関わるフェミニストの専門家たちであった。彼女たちは女性のクライアントが抱える心理的な困難や苦悩は社会の問題に起因していると主張し、社会・政治的分析の重要性を訴えた。以降、社会・政治的な分析を用いて、女性クライアントたちが内面化していた否定的な自己イメージを払拭し、クライアントをエンパワーすることがフェミニスト・セラピーの最も重要な役割の一つとなった。

ジグムント・フロイト (Sigmund Freud) の精神分析を下敷きに発展していった精神保健領域では、男性を基準として、主に男性の精神科医や心理学者などの

1 Laura S. Brown, *Feminist Therapy* (Washington, DC: American Psychological Association, 2009). 日本での名称がフェミニストカウンセリングとなった背景には、日本のフェミニストカウンセリングの先駆者である河野貴代美と井上摩耶子の間での会話があった。井上によれば、「セラピー (心理療法)」よりも「カウンセリング」の方が「私たちの実践に適切なネーミング」だと思ったという。河野もフェミニスト・セラピーの誕生の背景や理念の伝統的セラピーとの違いから「フェミニストカウンセリングと呼び換えたい」としている。本稿では主に合衆国でのフェミニスト・セラピーの歴史や展開、社会運動との関係について論じるため、「フェミニスト・セラピー」と表記する (井上摩耶子『フェミニストカウンセリングへの招待』(ユック舎、1998年)、37頁; 河野貴代美『フェミニストカウンセリング』(新水社、1991年)、13頁)。

専門家たちが女性の患者の問題に名称をつけていた²。初期から活躍する主要なフェミニスト・セラピストの一人であるミリアム・グリーンズパン (Miriam Greenspan) によると、精神保健基準は健康で成熟した成人の基準を男性に合わせて設定しているため、女性は「患者」と見なされた。この見立ては女性を病理と抱き合わせ、男女間にヒエラルキーを生み出した。一方、女性が男性に比べて劣った存在であることを拒否して男性基準を満たす人物であろうとすると「女性ではない」と見なされる³。この二重基準は、女性たちに二級市民に甘んじるか、男性に同化することによって女らしさを手放すかの極端な選択を迫り、苦しませていた。精神分析やそれを下敷きにした精神医学や心理療法は女性を救うどころか自己批判に陥れかねなかった⁴。ハンナ・ラーマン (Hannah Lerman) はシュラミス・ファイアストーン (Shulamith Firestone) の議論を用いつつ、フロイトの精神分析理論の影響力は専門家たちの間に留まらず、1950年代から1970年代にかけてアメリカ社会全体へ広がり、社会における女性の抑圧を正当化する主要因となったことを指摘した⁵。第二波フェミニズムの運動の発端となった女性たちの「名前のない問題」を明らかにしたベティ・フリーダン (Betty Friedan) は、フロイトの精神分析理論は、女性は男性と比べて劣等だという女性観を科学的に広め、合衆国の女性たちに真理を見失わせ苦悩をもたらしたと指摘する⁶。以上の様な批判から、フロイト主義を継承する伝統的セラピーは女性がその性別ゆえに抱える問題を解消するためには適切ではないと言える。この点から、フェミニストたちの手で女性を脱病理化し、精神保健分野、そして社会の性差別に抵抗するべく心理学的理論や実践としてのフェミニスト・セラピーは誕生した。

クライアント個人のエンパワーメントへの取り組みと同時に、フェミニスト・

2 Miriam Greenspan, *A New Approach to Women and Therapy* (New York: McGraw-Hill Book Company, 1983). グリーンズパンは、個人を診る心理学を(1)伝統主義、(2)行動主義、(3)人間中心主義という3つの方法に分類している。伝統主義は他にもフロイト派やネオ・フロイト派とも称される。フェミニスト・セラピーと対比して語られる伝統的セラピーとは伝統主義に基づいて行われるセラピーのことを指しており、「精神力学的セラピー (psychodynamic therapy)」と呼ばれる (p. 12)。また、グリーンズパンによれば、当時、「女性は、州や郡の精神病院以外でのあらゆる精神医学的システムでの主な患者」であった (p. 5)。

3 Ibid., 7.

4 Ibid., 16-21.

5 ハンナ・ラーマン「パーソナリティに関するフェミニスト理論の発展を妨げるもの」L. B. ローズウォーター、L. E. A. ウォーカー編 (河野貴代美・井上摩耶子訳)『フェミニスト心理療法ハンドブック——女性臨床心理の理論と実践』(ヒューマンリーグ、1994年) 5-6頁。

6 Betty Friedan, *The Feminine Mystique*, Twenty Anniversary ed. (New York: W.W. Norton & Company, 1983 [1963]), Chap. 5. (=ベティ・フリーダン (三浦富美子訳)『増補 新しい女性の創造』(大和書房、1977年)、第5章。)

セラピストたちは社会運動や政治的な活動に積極的に参加してきた。それは、伝統的な心理療法と大きく異なる点である。ソーシャルワークも個人の問題が社会の問題に起因している点に着目し、個人と社会の双方へのアプローチからクライアントの問題解決にあたるという点でフェミニスト・セラピーと共通点を持つものである⁷。伝統的セラピーの訓練を受けた経験があるグリーンズパンは、精神保健分野での専門家の序列を家父長的家族に見立てた。その序列によると、精神科医と心理学者はそれぞれ父と年長の息子、ソーシャルワーカーと看護師は母／妻と娘、患者は子どもである⁸。このように、専門家たちの間にも父と息子による一家の女性と子どもへの支配という構図があることが説明されている。一方、カウンセラーは一家から周辺化された存在とされる⁹。本稿では、こうしたカウンセラー／セラピストの専門家の中での周辺の立場から権威である男性中心的精神保健分野の言説に抗することの重要性を考慮し、フェミニスト・セラピーに焦点を絞る。

そのうえで本稿では、「なぜ、フェミニスト・セラピストは社会運動への参加を重視するのか」という問いを立てる。フェミニスト・セラピーの歴史とその展開に目を向けることで、フェミニスト運動から生まれたフェミニスト・セラピーがどのように社会運動に関連しているのかを明らかにできるかどうかを検討する。そのために合衆国のフェミニスト・セラピストの一人であるローラ・S・ブラウン (Laura S. Brown) が *Feminist Therapy* (2009) で展開した発展過程を批判的に検討する。

I. 合衆国におけるフェミニスト・セラピーの発展

英語圏ではフェミニスト・セラピーの歴史や発展を整理した文献が既に見られる。先述のブラウンの著書は、フェミニスト・セラピー初期から活躍する彼女がその発展についてまとめたものである。ブラウンによれば、その発展は約10年毎の時代区分で4段階に区切ることができるという¹⁰。その4段階とは、(1)1960年代～1980年代初めの「差異なきフェミニズム」、(2)1980年代半ば～1990年代

7 Brenda Dubois, and Karla Krogsrud Miley, *Social Work: An Empowering Profession*, 6th ed. (Boston: Pearson Education, Inc., 2008).

8 Greenspan, *A New Approach*, 40-41.

9 Ibid., 42. 専門家の権威を保つ要素の一つはクライアントとの「距離」であるが、カウンセラーはしばしばその境界が曖昧になる。それは、カウンセラー自身がクライアントが抱えている問題の経験者である場合があるためである。

10 Brown, *Feminist Therapy*, 18-28.

半ばの「差異とカルチュラル・フェミニズム」、(3)1990年代半ば～現在の「等しい価値を持つ差異のフェミニズム」、(4)21世紀の「多文化・グローバル・ポストモダンフェミニズム」である。

1. ブラウンによるフェミニスト・セラピーの発展段階

i. 第1段階（1960年代～1980年代初め）——「差異なきフェミニズム」

改革主義者（reformist）フェミニズム¹¹とラディカル・フェミニズムは初期のフェミニスト・セラピーに影響を与えた。両者ともに、男女に能力や技能による差は無いと主張し、それにも拘わらず女性は生まれ持った性別によって差別を受けていると訴えた¹²。改革主義者フェミニズムの主張は、心理療法において、「より多くの女性をセラピストとして実践させること」や、「女性の生活や経験に関する情報をセラピストの訓練で利用可能にすること」に表れている。しかし、改革主義のフェミニストたちは組織的な性差別や女性嫌悪、それらに関連する抑圧を批判するわけではなかった¹³。

一方で、ラディカル・フェミニズムの主張は、典型的な心理療法での支配関係を批判し、セラピストクライアント間の対等な関係の構築を目指す初期の議論に見ることができる¹⁴。またラディカル・フェミニズムの実践において幅広いテーマで取り組まれた意識覚醒（Consciousness Raising、以下、CR）グループの活動はフェミニスト・セラピーの起源とされている。加えて、ラディカル・フェミニズムの「個人的なことは政治的なこと（the personal is political）」という命題は、現在もフェミニスト・セラピーの基本理念として受け継がれている。

概念化されずにいた女性たちの問題に光を当て、フェミニスト・セラピーに影響を与えた改革主義者フェミニズムとラディカル・フェミニズムであったが、両者ともに、性差別という一元的な問題に取り組むあまり、その他の抑圧に対して敏感でなかったことが指摘されている¹⁵。政治的な分野でのフェミニズムに対するマイノリティのフェミニストからの批判を受け止めて、フェミニスト・セラピー

11 ブラウンの発展段階の整理で用いられる改革主義者フェミニズムという名称は一般的にリベラル・フェミニズムと称される。1章1節では、ブラウンが記した通り、改革主義者フェミニズムと記述する。その後の章ではリベラル・フェミニズムと記述する。

12 Ibid., 19.

13 Ibid., 20.

14 Ibid.

15 Ibid., 20-21; Carolyn Zerby Enns, *Feminist Theories and Feminist Psychotherapies: Origins, Themes, and Variations* (New York: The Haworth Press, Inc., 1997); Deborah K. King, "Multiple Jeopardy, Multiple Consciousness: The Context of a Black Feminist Ideology," *Signs* 14, no. 1 (1988).

も第2段階へと進んだ。

ii. 第2段階（1980年代半ば～1990年代半ば）——「差異とカルチュラル・フェミニズム」

第1段階で男性と同等だと主張することに重点を置いていたこととは対照的に、第2段階のフェミニスト・セラピーは、女性性をより高く評価したことに特徴がある。精神保健分野では、フェミニスト精神科医や心理学者らによる男性とは異なる女性の発達に関する理論が構築され、家父長制の下で否定されていた女性性の価値に光が当てられた。これらの理論は現在のフェミニスト・セラピーの実践にも影響を与えている¹⁶。一方で、生得的な差異を認める立場は、女性と男性を社会的に区別するジェンダー化の視点を再創造すると危ぶむという見方もある¹⁷。

この段階では、フェミニスト・セラピーを他の理論から差別化するためにハンナ・ラーマンが初めてフェミニスト・セラピーの基準を提示した。また、フェミニスト・セラピー協会（Feminist Therapy Institute）によって倫理規定が定められた時期でもあった¹⁸。

加えて、第1段階での第二波フェミニズムに対する白人・中産階級・異性愛主義中心というマイノリティ女性たちからの批判に対して、フェミニスト・セラピーも内省し応答する必要があった。フェミニスト・セラピー内部では、有色、貧困または労働者階級、同性愛、障がい者などのマイノリティのフェミニスト・セラピストたちが、女性たちの経験の多様性と複雑さの現実への注意を怠っている、とフェミニスト・セラピーと実践者たちを批判した¹⁹。この頃フェミニスト・セラピストは、「一般的な家父長制の文脈でなく、特定の文化や環境などの文脈において女性を概念化」し始めた。また、「どうやって周辺化された女性たちの経験から学ぶことによって、それに基づいたフェミニストのやり方で苦悩に対応する

16 Brown, *Feminist Therapy*, 22; Dorothy Dinnerstein, *The Mermaid and The Minotaur: Sexual Arrangements and Human Malaise* (New York: Harper & Row Publishers, 1976); Jean Baker Miller, *Toward a New Psychology of Women*, 2nd ed. (Boston: Beacon Press, 1986 [1976]); Carol Gilligan, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development* (Cambridge: Harvard University Press, 1982); Nancy Chodorow, *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender* (Berkeley: University of California Press, 1978); Nancy Chodorow, *Feminism and Psychoanalytic Theory* (New Haven: Yale University Press, 1989).

17 Brown, *Feminist Therapy*, 22-23.

18 Ibid., 23-24; Hannah Lerman, *A Mote in Freud's Eye: From Psychoanalysis to the Psychology of Women* (New York: Springer Publishing Company, 1986), 171-179.

19 Brown, *Feminist Therapy*, 24.

ことができるのか」を模索し始めた²⁰。

iii. 第3段階（1990年代半ば～現在）——「等しい価値を持つ差異のフェミニズム」

この頃、フェミニズムの政治的な策略は、フェミニスト心理学による男女間の差異と共通点に関する研究や、同じ性別であってもその他の社会的条件や経験の違いによって左右されることを踏まえるようになった。政治的なフェミニストたちは、男女は「同じ」であるから平等な扱いを受けなければならないという主張ではなく、差異はあっても人はみな平等であるから同じ扱いと機会を得られなければならないと主張するようになった²¹。フェミニスト心理学者やセラピストの中には、フェミニスト・セラピストは女性のためだけのものなのかと問う者も現れた。男性のクライアントとのセラピーを実践する者も既に存在していたという。

この段階を特徴づけるものとして、ブラウンは1993年にアメリカ心理学会の部会の一つである女性心理学会（Society for the Psychology of Women, Division 35 of the APA）とアメリカ心理学会（American Psychological Association、以下、APA）の教育理事会後援で開かれた「フェミニスト実践における教育とトレーニングに関するコンセンサス会議」を挙げている²²。

90年代にはフェミニスト・セラピーの実践に関する理論が多く紹介され、20世紀の終結までにフェミニスト・セラピーの実践と性格に関する理論は他のセラピーのアプローチから完全に区別された²³。

iv. 第4段階（21世紀）——「多文化・グローバル・ポストモダンフェミニズム」

今日のフェミニスト・セラピーはより包括的な視点を持って実践に取り組むようになってきている。旧植民地であったグローバル・サウス出身のフェミニスト・セラピストたちが北米で存在感を示し、より多文化主義的でグローバルな分析が行われている。例えば、「心理的な植民地化（psychological colonization）」という概念は、家父長制がどのように、なぜ、クライアントたちに強い影響を残し続けるのかということについてのフェミニスト・セラピストたちの理解を深めた²⁴。

他にも、ポストモダン・フェミニズムは、より多様な人間存在に対応できるよ

20 Ibid., 24-25.

21 Ibid., 25.

22 Ibid., 25-26.

23 Ibid., 26.

24 Ibid., 27.

うな実践の模索に貢献している²⁵。ポストモダンの影響を受けた第4段階のフェミニスト・セラピーは、特に第2段階で自明視されていた本質的な女らしさや男らしさに対して疑問を投げかける。生物学的性（sex）がジェンダーに先立つものではないということを新たな理解として組み込むために、フェミニスト・セラピーは変化を求められるだろう²⁶。そのような流れの中であって、男性のフェミニスト・セラピストも広く受け入れられるようになっている²⁷

2. ブラウンへの批判的考察

ブラウンは、発展の4段階を、「一般的な心理学における研究と実践および主に合衆国で提起されたフェミニズムの時流を反映して」整理している²⁸。それでは、それぞれの段階において、フェミニスト・セラピーと社会運動との関連についてはどのように議論されているのだろうか。

第1段階では第二波フェミニズム運動の政治的要求とフェミニスト・セラピーの実践の関係が明瞭である。女性による改革運動として女性参政権の獲得を主題にした第一波フェミニズムに対して、第二波フェミニズムはより強く社会構造の変革を目指す運動であった²⁹。主婦として家庭に入った白人中産階級の高学歴の女性たちが抱えた「名前のない問題」を指摘したベティ・フリーダンを中心に、あらゆる面での女性の社会・政治への参加を主張するリベラル・フェミニズムが第二波フェミニズムとして成立する³⁰。他方、ベトナム戦争に反対する新左翼運動や公民権運動の中から、運動内での性差別に憤った女性たちが2つのフェミニズムの潮流を築いた。そのうちの一つが女性の抑圧の根源は家父長制にあると考えるラディカル・フェミニズムであり、他方は、マルクス主義の影響を受け、資本主

25 ポストモダン・フェミニズムについて坂本佳鶴恵は「ポストモダン・フェミニズムについての共有された定義や了解はまだない」という（坂本佳鶴恵「ポストモダン・フェミニズムの戦略とその可能性」『理論と方法』15巻1号（2000年）、89頁。）。本稿では坂本が主張する以下の2点を含む考えをポストモダン・フェミニズムとする。(1)反本質主義であること。フェミニズムにおいてはセックスによって分けられた女と男というカテゴリーの使用を疑問視する。「カテゴリーの本質化によって生ずる思想的・社会的効果」を問題視する（91頁）。(2)差異を分析すること。文脈に根差した差異と平等の分析や、スピヴァクのサバルタン研究に代表されるようなポストコロニアリズム研究を含める（93-95頁）。

26 Brown, *Feminist Therapy*, 118.

27 Ibid., 27.

28 Ibid., 18-19. 筆者訳。

29 栗原涼子「1 第一波フェミニズムをめぐる女性運動史」渡辺和子編『アメリカ研究とジェンダー』（世界思想社、1997）；渡辺和子「2 第二波フェミニズム運動の軌跡と理論」渡辺和子編『アメリカ研究とジェンダー』（世界思想社、1997年）。

30 河野貴代美他『フェミニストセラピー』（垣内出版、1986年）；河野貴代美『フェミニスト・カウンセリング』（新水社、1991年）。

義体制と家父長制に女性解放の鍵があると考えたソーシャリスト・フェミニズムである³¹。ブラウンの整理では、両フェミニズムの政治的要求と実践が初期のフェミニスト・セラピーに与えた影響が説明された。

続く第2段階では、フェミニスト・セラピーにおけるカルチュラル・フェミニズムの影響や第二波フェミニズムの主張へのマイノリティからの批判が示された。1975年以降の合衆国でのフェミニズム運動は、ラディカル・フェミニズムの勢いが弱まり、それに代わり女性性を高く評価し直すカルチュラル・フェミニズムがその議論を発達させた³²。その中での議論がフェミニスト・セラピーで用いられる理論にも影響を与えたことが示されている。

しかし、第3段階に入ると、ブラウンによるフェミニズム運動とセラピーの実践との関連に関する議論が他の段階に比べて希薄になる。発展の整理に用いたブラウンの著書は2009年に書かれたものだが、その前年の別の文献で、ブラウンは前述のAPAの後援を受けた会議の開催は(1)多くの著名で力のある著者、思想家、実践家が集まり、フェミニスト・セラピストの訓練の基準の考案に尽力した点、(2)APAがこの会議を後援したことがフェミニスト・セラピーの主流の心理学への影響を示した点で重要だったと述べている³³。ブラウンが2009年の著書でこの会議の開催に言及した理由も同様の理由からだと推測できる。だが、この会議の重要性はフェミニスト・セラピーの成長に関することで、これだけで第3段階でのフェミニズムの政治的な主張との関連を見ることはできない。

最後の第4段階では、ポストモダン・フェミニズム理論が中心的に論じられている。新たなフェミニズム理論を反映し、フェミニスト・セラピーの理論や実践を洗練していくことは重要である。しかし一方で、第4段階でのフェミニズムと第1・第2段階のフェミニズムでは社会運動への態度に違いがあるように思われる。第1・第2段階は、明確な政治的要求と行動を伴う第二波フェミニズムの主張と発展、そしてそれに対する批判によってフェミニスト・セラピーも特徴づけられていた。しかし、第3段階以降は理論への傾倒が見て取れる。特に第4段階でのポストモダン・フェミニズム理論をフェミニスト・セラピーの実践とどう繋げていけるのか、ブラウンの整理では検討の余地を残している。

第二波フェミニズムが目指した家父長制や性差別の根絶が未だ達成されていな

31 Enns, 47, 65.; 渡辺, 33-34 頁。

32 渡辺, 前掲書; 栗原涼子『アメリカのフェミニズム運動史——女性参政権から平等憲法修正条項へ』(彩流社, 2018年)。

33 Laura S. Brown, "Feminist Therapy," in *Twenty-First Century Psychotherapies: Contemporary Approaches to Theory and Practice*, ed. Jay L. Lebow (New Jersey: John Wiley & Sons, Inc., 2008), 283.

いことはフェミニスト・セラピーが社会運動への参加を重視する理由と関係があるだろう。ブラウンへの批判から、以下ではフェミニスト・セラピーと社会運動の関連を考えるうえで重要な概念とは何かを明示し、また、それらの概念と社会運動や政治的な行動へのフェミニスト・セラピストの参加の結びつき明らかにする。

II. フェミニスト・セラピーと社会運動を繋ぐ4つのキー概念

前述したように、フェミニスト・セラピーは性差別主義を廃した新しい心理療法のアプローチを採ることを目指した。では、どのようなセラピーをフェミニスト・セラピーと呼ぶのだろうか。ブラウンはフェミニスト・セラピーの実践の特徴を次のように表現する。

そのセラピー実践はフェミニスト政治哲学やフェミニスト分析によって特徴づけられており、女性やジェンダー心理学についての多文化フェミニストの学識に基づいている。それはセラピストとクライアントの両者を、個人的な日常生活や社会的・感情的・政治的環境での関係におけるフェミニスト的な抵抗、変化、社会変革へと前進させる策略や解決策へと導く³⁴。

このような実践を行うため、フェミニスト・セラピストが遵守すべき倫理規定が設けられた。ブラウンによる発展第2段階に位置する1987年5月には、約20年に亘る実践の反省も込めてフェミニスト・セラピー独自の倫理規定がフェミニスト・セラピー協会により制定された³⁵。セラピストの信条や、クライアントが望むエンパワーメントの方針が多様なフェミニスト・セラピーには、典型的な実践方法がない。よって各々のフェミニスト・セラピストはフェミニスト・セラピー協会の倫理規定に基づいた実践を求められる。

34 Laura S. Brown, *Subversive Dialogues: Theory in Feminist Therapy* (New York: Basic Books, 1994), 21-22. 筆者訳。

35 "Feminist Therapy Institute Code of Ethics," in *Feminist Ethics in Psychotherapy*, ed. Hanna Lerman and Natalie Porter (New York: Springer Publishing Company, Inc., 1990), 37-40.; Brown, "Feminist Therapy," 282-283; Brown, *Feminist Therapy*, 24. 倫理規定で示されているのは大別して、(1)文化的多様性と抑圧、(2)権力格差、(3)重複した関係性、(4)セラピストの説明責任、(5)社会変革、である。その前文では、フェミニストの個人的なことは政治的なことという信条、フェミニスト・セラピストはその役割の中でフェミニスト分析を用いること、女性のエンパワーメントのために生活や仕事において抑圧の根絶へのイニシアティブをとる責任を負うことなどが示されている。

以下ではフェミニスト・セラピーと社会運動との関連の意義を理解する上で最も重要と思われる概念として、①クライアント—セラピストの「対等な関係」、②CR、③エンパワーメント、④「個人的なことは政治的なこと」、を提示する。これらの概念は社会の男性支配に対し、周辺の立場から対抗することと密接に繋がっていると考えられる。

1. クライアント—セラピストの対等な関係 (egalitarian relationship)

フェミニスト・セラピーが成立当初からクライアント—セラピスト関係に対して意識的に取り組む背景には、伝統的セラピーへのフェミニスト批判がある。伝統的セラピーでは、専門家が女性患者を男性の視点から正常か異常か見定め、治療を施す。女性にとって何が必要かを本人ではなく専門家が判断するという関係は、社会での男性支配と女性の従属という関係にそのまま置き換えられる³⁶。そのような性差別的な社会の構造をセラピーに持ち込ませないためにフェミニスト・セラピーの過程ではクライアントとセラピストの対等な関係を重んじるのである³⁷。

例えば、伝統的な専門家と患者の関係を廃するため、セラピストは、クライアントに対してどのようなセラピーを行うのか、セラピストがどのような人物かを説明する。これらを通してセラピストを脱神秘化する。そして、クライアントがセラピストを過信せず、クライアント自身の力抜きでは自己変革は達成しえないと気づかせるのである³⁸。フェミニスト・セラピーでは、伝統的セラピーで医師やセラピストが専門性を保つために行うような、クライアントとの心理的距離を取ることはしない。むしろ、セラピストはクライアントの語りを聴き、クライアントが必要とする情報を提示し問題の解消を目指すための協働関係を構築しようと試みるのである³⁹。診断名などもなるべく使用しないようにする。セラピー料金の保険適用などの条件があるような場合にのみ、クライアントとよく話し合った上

36 Phyllis Chesler, *Women and Madness* (Chicago: Lawrence Hill Books, 2005 [1972]); Greenspan, *A New Approach*, 32.

37 フェミニスト・セラピーで強調されるセラピストとクライアントの対等な関係 (egalitarian relationship) では、セラピストの専門家としての権力が無視されるわけではない。セラピストは自身の立場を理解した上で対等な関係の構築を目指さなければならない。メアリ・A・ダグラス「フェミニストセラピーにおけるパワーの役割：組み換え」L. B. ローズウォーター、L. E. A. ウォーカー編 (河野貴代美・井上摩耶子訳)『フェミニスト心理療法ハンドブック——女性臨床心理の理論と実践』(ヒューマンリーグ、1994年)、203-204頁。

38 Greenspan, *A New Approach*, 235-236.

39 Ibid., 234-235.

で彼女の問題に適切と思われる診断をつける⁴⁰。

セラピストは対等性を重んじるために、自分自身やクライアントがどのような社会的立場にあるかを意識する必要がある⁴¹。また、実践の場面はセラピストにとって「平等主義的意図を伝える第一の要素」であるため、セラピストはセラピーに直接関わりがないと思われるような実践の細部にまで気を配ることも必要とされる⁴²。例えば、セラピーを行うオフィスは女性にとって安全な場所にあるか、公共交通機関へのアクセスはどうか、オフィスが「階級中立的」な装いかどうか、料金がスライド制であるか否か、などへの配慮が求められる⁴³。

伝統的セラピーへの批判から生まれた概念は、様々な背景を持ったクライアントとのセラピーを想定した、より包括的で対等な関係の構築を目指している。これらの実践は新たなニーズが浮上するたびに検討されるだろう。

2. CR

フェミニスト・セラピーにとってCRグループは、実践の起源であり、中心的役割であり続けている⁴⁴。CRは第二波フェミニズムの中でも特にラディカル・フェミニズムとの繋がりが強い実践である。リーダーのいない少数の女性たちのグループの中で様々なテーマで女性たちの日常の経験を話し合うという形で行われた。CRの実践に参加した女性たちは、自分の抱えている問題が自分だけの問題ではなく、他の女性たちも同様の経験をしていることに気がついた⁴⁵。さらに、自分たちの抱えている問題は内面の問題ではなく、家父長制による様々な規範によって引き起こされているという確信を得た。

グリーンズパンは、彼女自身がCRグループへ参加した経験を振り返っている。女性たちは率直に自分自身の生活について話し合い、共通点を探った。また女性に期待される行動として規定された「自己管理、沈黙、従属」に逆らい、彼女たちの生活が社会と相互関係にあることが話し合われた。女性たちの物語は個人的に重要であるだけでなく、社会の歴史にとって重要なものとして話し合われたと

40 Brown, *Feminist Therapy*, 50-51.

41 Ibid., 109-110.

42 ローラ・ブラウン「フェミニストセラピー開業の倫理とビジネス」L. B. ローズウォーター、L. E. A. ウォーカー編（河野貴代美・井上摩耶子訳）『フェミニスト心理療法ハンドブック——女性臨床心理の理論と実践』（ヒューマンリーグ、1994年）、257頁。

43 Ibid.

44 Brown, *Feminist Therapy*, 3.

45 Enns, 50; 河野『フェミニストセラピー』、13-15頁。

いう⁴⁶。CRに参加した女性たちは男性支配の中で内面化した意識を覚醒させた。

CRグループの実践がフェミニスト・セラピーの実践に与えた大きな影響の一つとして、男性による女性に対する暴力を可視化させたことが挙げられる。1970年代から性暴力研究が増加した背景には、女性の経験を安心して語るができる場で女性たちが自分自身の経験を語り始めたことがあった。フリーダンが女性たちの抱えた問題を「名前を持たない問題」と呼んだことは偶然ではないとジュディス・L・ハーマン (Judith L. Herman) は言う。

女性の生活の実際の条件は、個人の世界、私人としての生活の中に隠されていた。[...] 性生活あるいは家庭生活における体験を口にすれば、公衆の前で屈辱を味わい、嘲けられ、バカにされ、信用を失うもとなつた。女性は恐怖と屈辱とによって口をつぐまされておられ、女性の沈黙によって性的および家庭内の女性搾取のあらゆる形態に免許が与えられていた⁴⁷。

CRグループによって、女性たちは語りだす際の壁を乗り越えられるよう手助けされた。性暴力の被害者たちは、第一次世界大戦やベトナム戦争後の帰還兵たちの研究を経て明らかにされた外傷後ストレス障害 (Post Traumatic Stress Disorder、PTSD) と本質的に同様の症状を呈することが明らかにされている。また、ベトナム戦争に反対する帰還兵らが自助的に行っていた「おしゃべりグループ」と類似した特徴をCRグループも持っていた。どちらも親密関係で、秘密厳守の規則があり、真実を語ることを最も重要視していた。加えて「精神療法と相似形であるけれども、その目的は個人を変えることでなく社会を変えようということにあった」とハーマンはCRに特有の社会変革志向について述べている⁴⁸。その説明通り、CRグループで高められた被害者たちの声は徐々に公的領域における政治運動へとその範囲を広げていったのである⁴⁹。

3. エンパワーメント

フェミニスト・セラピーの目的を最も簡潔に言い表すのであれば、それはクラ

46 Miriam Greenspan, "On Being a Feminist and a Psychotherapist," *Women & Therapy* 17, nos. 1-2 (1995): 230.

47 ジュディス・L・ハーマン (中井久夫訳) 『心的外傷と回復』 (みすず書房、1996年)、38頁。

48 前掲註、40頁。

49 ハーマンはまたCRを「経験的な質問法」でもあったと評している。CR運動の創始者の一人のキャシー・サラチャイルド (Kathie Sarachild) を引いて、CRは女性たち自身の経験から今まで学んできた理論を再検討し、「世間通用の知的正統に対する反抗の旗揚げ」だと述べている。前掲註、40頁。

クライアントのエンパワーメントである。例えば、伝統的セラピーや精神医学の目的が患者の症状を取り払うための治療であるのに対し、フェミニスト・セラピーではクライアントが抱える症状を単なる問題として処理をしない。それらの症状はクライアントが抑圧的な環境に直面した際に、自分自身を守るために取った対処や努力の影響だと理解されている⁵⁰。クライアントたちが自分自身の欠点や問題として認識している症状を再考し、限られた資源や情報を用いて抑圧的な状況をいかに生きてきたのかを説明することは、彼女たち自身が既に有している力を自覚させることに繋がる。

初めてセラピーを訪れたクライアントたちは自分自身を無力だと考えていることが多い。その際にブラウンは「個人の力の生物心理社会的・霊的存在軸 (The Biopsychosocial/Spiritual-Existential Axes of Personal Power)」を提示し、家父長制下での抑圧によって引き起こされた「無力の催眠状態 (trance of powerlessness)」を解き、クライアントが持つ力を理解してもらうのだという⁵¹。女性は日常的に家父長的権力による抑圧を受け、力の行使を制限されていることも関係し、力に対して否定的な考えを持つ人が多い。そのため、フェミニスト・セラピストはクライアントが力 (power) に種類があることやその区別への理解を支援する必要がある⁵²。例えば女性たちは「男性たちよりもはるかに素晴らしい人間活動にかかわる感情的要素への感覚を持っている」⁵³。この能力は女性の性役割に基づいた養育、すなわち他者の成長を促進させる面でも大いに発揮される。感情を押し量り、他者のニーズに適切に応え彼らの成長を促進させる力がある。しかし、女性たちは自分自身の成長や発達にその力を行使するのではなく、他者に振り向けるようにされてきた。女性たちがその力を用いて自分自身の感情や

50 Enns, 10-12; Greenspan, *A New Approach*, 97.

51 Brown, *Feminist Therapy*, 31-34. ブラウンは、力は「生物心理社会的・霊的存在軸モデル」では(1)身体の力、(2)個人内部・精神内部の力、(3)人間関係・社会的文脈の力、(4)霊的・経験的な力の4つにカテゴライズできると述べる。それぞれの力の特長は：(1)身体が安全な場所として経験され、また適切に栄養を与えられた状態を受け入れられること、(2)自分の考えていること、批判的に考えていることを理解しており、また暗示にかかりやすくなく、柔軟に考えを変えることができること、(3)人間関係において効果的であり、いつも他人に影響を与えることを望み、支配的な幻想を持たず、自分も他人も許すことができ、かつ自己防衛的であり、区別ができるが柔軟であること、(4)生活に存在する困難に対応する際に意味を持たせることができ、また心地よさと安寧を感じられるような潜在能力を有していること、である。

52 Enns, 27-28.

53 Miller, 38-39. ミラーは、女性たちが培った感情を読み取る力は、支配者の感情を読み取るために従属者であるからこそ培われたものだと指摘する。その上でその能力を人間生活に欠かせないものとして高く評価する。

ニーズにも応えることができると気づくことはエンパワメントに繋がる⁵⁴。

セラピーの方針を決定する際にもクライアントが自分自身の力を常を感じられる状態であることが重要だ。フェミニスト・セラピーではクライアント自身が最もよく自分自身のことをわかっている専門家であると考え⁵⁵。クライアントは診られる客体ではなく、主体的にセラピーの中で自分に必要な手立てを自己決定することが促される。クライアントの主体的な選択は、従属的な立場で他者のニーズを優先させてきた女性やマイノリティの人々に自分自身の要求を意識させることに繋がる。自分自身のニーズに気づくことは自己変革への第一歩である。

4. 個人的なことは政治的なこと

「個人的なことは政治的なこと」だというスローガンは第二波フェミニズムの基本理念である。フェミニスト・セラピーが個々のクライアントの個人的な経験に対して社会・政治的な分析を加えるのはこの理念に基づいている。1章で見たように、第二波フェミニズムでは、リベラル・フェミニズムもラディカル・フェミニズムも社会の中での女性に共通する経験や同じ女性であるということを戦略的に押し出した。

一方でマイノリティのフェミニストたちは、運動の理念として掲げられたそのスローガン自体が、第二波フェミニズムの白人中産階級中心主義を示していると批判した。「個人的なことは政治的」というスローガンで想定されるのは、特権を持った中流階級の白人女性たちの共通した経験であり、有色の女性や労働者階級または貧困層の女性たちの経験を考慮していない、という批判である⁵⁶。黒人女性の経験から言えば、彼女自身が家計の維持に必要な労働、家事、母親の役割を担う場合も多く、これらの競合する需要が黒人女性の女らしさの定義や彼女の周囲の人々との関係に影響を及ぼしていた。夫が稼ぎ手で、妻が家事や育児を担うという公私の別のある白人中産階級の女性の「名前のない問題」は、彼女たちの経験には当てはまらない⁵⁷。デボラ・キング (Deborah K. King) は黒人女性を表現する読み物、情報、スピーチ、代表的な人物の欠如などは彼女たちがフェミニズムの中で周縁化されていることを示す一例だと指摘する⁵⁸。人種や経済的な側面での差異だけでもこのような経験の違いが見られる。今日のフェミニスト・セラピーが想定するべき女性たちの経験の差異はより幅広いはずだ。

54 Ibid., 39-40.

55 Enns, 14-15.

56 King, 58.

57 Ibid., 49-51.; Enns, 94-95.

58 King, 59.

マイノリティからの批判を受け止めた上でも、「個人的なことは政治的だ」と言うことは個人の経験を社会構造に照らして考える際に重要ではないだろうか。ジャネット・テイラー (Janette Y. Taylor) は、黒人女性たちが同じく黒人であるパートナーからの暴力について証言することが彼女たちやコミュニティにとっての癒やしになると主張する。テイラーは、かつて医療や科学的研究で黒人へ非人道的な行為が行われていた歴史の影響や黒人コミュニティへの遠慮から、黒人女性たちの研究への参加が少ないのではないかと考察している。しかしコミュニティの内外からの暴力に対して彼女たちが自らの経験を語ることは、同じ経験をもつ女性たちを助けることに貢献する、と指摘する⁵⁹。

個人的な経験を個々のマイノリティが語り始められるなら、今まで議論されずにいたマイノリティのニーズを可視化し、その積み重ねによってコミュニティを含む社会を変えることが可能ではないか。だが、この役目を個人が担うのは負担が大きい。むしろ、フェミニスト・セラピーの実践が個人的な経験に寄り添い、それらを政治的なこととして社会に問うことが大切ではないだろうか。

本章で提示した以上の4つの概念の分析からは、フェミニスト・セラピーでは、その実践において、クライアントの自己変革と性差別的な社会の変革を求める社会運動が結びつくことが明らかであるといえよう。

Ⅲ. 社会運動とフェミニスト・セラピー

本章では、前章で概観したクライアントの自己変革と社会変革との関連をフェミニスト・セラピーが関与する社会運動に着目し、より詳しい検討を試みる。フェミニスト・セラピーにとっての社会運動の位置づけ、およびフェミニスト・セラピストの社会運動や政治的な行動への参加がもつ意味やクライアント自身がそれらの運動に関わる意義について考えようとするものである。

1. セラピストによる社会運動への参加とその意味

フェミニスト・セラピストにとって、クライアントのエンパワーメントはセラピー・ルームでのセラピーに止まらない。ジュディス・L・ハーマンは、フェミニストたちが1970年代から取り組んできた、女性に対する暴力の中心的課題であるレイプや近親姦の被害者たちのトラウマについて、彼女自身の臨床実践を基

59 Janette Y. Taylor, "Taking Back: Research as an Act of Resistance and Healing for African American Women Survivors of Intimate Male Partner Violence," *Women & Therapy* 25, nos. 3-4 (2002).

にその回復の道筋と段階をフェミニスト視点から明らかにした。ハーマンは「政治運動の支えなしに心的外傷の研究が推し進められたことはかつてなかった」と断言する⁶⁰。ここで明らかにされているのは、暴力によって引き起こされた心の傷に対して向き合おうとすると政治的な立場をとらざるを得ないということである⁶¹。フェミニスト・セラピストは、クライアントが抱える問題に関して、時にセラピスト自らの経験からの理解、学び、共感、感情をクライアントと共有する⁶²。また、言葉にはしなくてもその態度やクライアントと向き合う空間の中で自分の立場を表明する。ハーマンは、起きた出来事が人災であった場合、「証言者は被害者と迫害者との争いの中に巻き込まれる」という⁶³。加害者が周囲に求めることは無関心や無関与と加担しやすいものである。一方で被害者は周囲に対して積極的な関与を訴える。

被害者のほうは、これに対して、第三者に苦痛の重荷をいっしょに背負ってほしいという。被害者は行動を要求する。かかわることを、思い出すことを要求する⁶⁴。

特にクライアントのエンパワーメントに関わるセラピストは徹底的にクライアントへの支持を表明する必要がある。そして、クライアントに利する行動を起こすことが求められる。

フェミニスト・セラピーの実践に政治的な行動が重要だという見解は広く認識されている⁶⁵。実際にセラピストたちはどのような運動や行動に参加してきたのかを、1970年代にラディカル・フェミニストたちの手によって可視化、問題化さ

60 ハーマン、45頁。ハーマンは心的外傷研究の展開を振り返り、三度の重要な展開の局面には必ず政治運動があったことを指摘する。それはそれぞれ19世紀末には「民主主義の確立」、20世紀初期には「戦争の絶滅」、20世紀後半には「女性の解放」を目指した。これらはどれも未だ達成されておらず三者は相関関係にある、というハーマンの指摘は注目に値する。

61 ここでの暴力は身体的な暴力のみを指すわけではない。ヨハン・ガルトゥングの暴力の定義で示されるような、暴力の行為体のいる「直接的暴力」や貧困や差別などの「構造的暴力」を指している。J. Galtung, "Violence, Peace, and Peace Research" in *Journal of Peace Research* VI, (1969): 3. PRIO publication No. 23-9.

62 Greenspan, *A New Approach*, 244.

63 ハーマン、4頁。

64 前掲註。

65 The Feminist Therapy Institute Code of Ethics で、セラピストは社会変革に繋がり得る様々な行動を取らなければならない、と記されている。

れた女性に対する暴力の告発に始まる活動に注目したい⁶⁶。

1971年に合衆国で最初のレイプ・クライシス・センターが開設され、同様のセンターの設立が続々と続いた。当初は、見知らぬ他人によるレイプの被害が注目を集めたが、徐々にレイプに関する議論が拡大し、知人によるレイプや近親姦、夫婦間における夫から妻に対する暴力などへも及ぶようになった⁶⁷。1982年のフェミニスト・セラピー協会の設立メンバーであるレノア・ウォーカー（Lenore Walker）は、女性に対する暴力の問題に積極的に取り組み、また「バタードウーマン症候群」の理論化を進めた⁶⁸。ウォーカーは虐待者である配偶者を殺害してしまった女性を支援するための専門家証人証言に立つなどのアドヴォカシーを行ってきた。彼女は「調査やセラピー経験を裁判に適用することは公教育を通じた大きな枠組みにおける社会変化に関わる」と述べ、アドヴォカシーが社会変革の一手段であると主張する⁶⁹。

不可視化されている暴力や被害者やサバイバーの経験を社会に対して明らかにしていくことは重要な活動である。例えばサバイバーでありフェミニスト・セラピーの原則を用いる臨床心理学者でもあるジョー・オッペンハイマー（Jo Oppenheimer）は、近親姦や性虐待などが不可視化されていた彼女の本国のイスラエルで、自らそれらを明るみにする展覧会を1993年に開催し、自分を含めたサバイバーの声を社会に知らしめた⁷⁰。オッペンハイマーは自身の取り組みの重要な点を次のように述べている。

明らかに、全ての参加者は政治的であり、彼女らの参加は社会を変革するという必要性を示していた。女性たちにとって、その展覧会が彼女たちの癒しのプロセスの一部であったことは明白であった⁷¹。

66 スーザン・ブラウンミラー（Susan Brownmiller）は、レイプは男性による女性の支配のための手段であると指摘した。（Susan Brownmiller, *Against Our Will: Men, Women and Rape* (New York: Simon and Schuster, 1975).）。「ニューヨーク・ラディカル・フェミニスト」で活動していたブラウンミラーは、レイプに関して「社会教育運動の中心」となった。栗原、前掲書。

67 ハーマン、42-44頁。

68 レノア・E・ウォーカー『バタードウーマン——虐待される妻たち』（金剛出版、1997年〔1979年〕）

69 レノア・E・A・ウォーカー「対人関暴力の被害者／生還者とのフェミニストセラピー」L. B. ローズウォーター、L. E. A. ウォーカー編（河野貴代美・井上摩耶子訳）『フェミニスト心理療法ハンドブック——女性臨床心理の理論と実践』（ヒューマンリーグ、1994年）、172頁。

70 Jo Oppenheimer, "Politicizing Survivors of Incest and Sexual Abuse: Another Facet of Healing," in *Feminist Therapy as a Political Act*, ed. Hill, Marcia (New York: Psychology Press, 1998).

71 Ibid., 85. 筆者訳。

このような行動は、同じような体験をした人や現在苦しんでいる人を孤立させないことにも繋がる。オープンハイマーの個人的な思いから始まった試みではあるが、彼女のクライアントやほかの被害者やサバイバーにとっても良い影響をもたらした。政治的な行動などと言うと選挙などを想定しがちだが、個人の癒しや目的に端を発した行動が社会に対して影響を及ぼし得ることをオープンハイマーの例は示している⁷²。このことを踏まえて次にクライアントが社会運動や政治的な行動に参加する意義について考える。

2. クライアントが社会運動に参加する意義

フェミニスト・セラピストたちは、社会変革は2つの側面から達成すると考えている。1つはクライアント個人の変革である。クライアントたちは意識を変化させることで彼女たち自身の生活を変えることができる。それが引いては社会変革へも繋がっていく。もう1つはクライアントとセラピストがフェミニスト運動と協力しつつ、セラピー以外にも様々な政治的な行動に取り組むことである。運動に参加することはクライアントにとってセラピー的な効果をもたらし得る。活動の中で自分自身の技術や能力に気づいたり、他の女性たちの生活を知ることによってオルタナティブを見つけられる可能性もある⁷³。

ただし、2点目において注意が必要なのはそれがクライアントのエンパワメントに結びつくものかどうかという点である。いかにセラピストが政治的な行動を信じていても、参加するかどうかの判断はクライアント自身に委ねられている⁷⁴。政治的な行動をクライアントに求めるかどうかに関しては、フェミニスト・セラピストによって意見が異なる。社会運動との結びつきが強いラディカル・フェミニスト・セラピストたちの間でさえも、草の根のセラピストと専門的な訓練を受けたセラピストでは方針にしばしば相違があるという⁷⁵。いずれにせよ、クライアントが行動を起こす際にはセラピストは十分な情報提供をしなければならない。その行動を取ることによってどのような効果が期待できるのか、もしくは代償を伴うのかを提示した上でクライアントの主体的な選択と意思を支持することが重要なのである⁷⁶。

72 Ibid., 86.

73 Masami Matsuyuki, "Japanese Feminist Counseling as a Political Act," in *Feminist Therapy as a Political Act*, ed. Marcia Hill, (New York: Psychology Press, 1998), 67.

74 Oppenheimer, 81.

75 Enns, 208. 草の根セラピストはクライアントとセラピストの両者が社会変革に参加すべきと考える傾向がある。一方、専門的トレーニングを受けたセラピストは社会変革をセラピストにとっては中心的な使命だが、クライアントにとってはオプションだと考える傾向がある。

76 Enns, 17-18.

ハーマンは、トラウマからの回復がある程度進み、生存の危機を脱した被害者／サバイバーたちは、「生存者使命 (Survivor Mission)」を見つけることができるという。

生存者の大部分は個人生活の範囲内で外傷体験の解消を図る。しかし少数ではあるが重要なのは、外傷の結果、より広い世界にかかわる使命を授けられたと感じる人々がいる。このような生存者はみずからの不運の中に政治的あるいは宗教的次元を認識し、おのれの個人的悲劇を社会的行動の基礎とすることによってその意味を変換できることに気がつく。残虐行為を帳消しにする方法はないけれども、それを超越する方法はあり、それは残虐行為を他者への贈り物とすることである⁷⁷。

自らの経験という知を他者へ贈ることが生存者使命の本質ではあるが、それは同時にサバイバーにとっての癒しに繋がる⁷⁸。合衆国のサンフランシスコ市に住む確率抽出サンプルによって選出された930人の女性たちを対象に、近親姦について、個人面接による調査を行ったダイアナ・E・H・ラッセル (Diana E. H. Russell) も、サバイバーが政治運動と繋がりを持つことに肯定的だ。トラウマを負ったサバイバーはその問題についての「社会的行動をとることでエンパワーされ、社会に大きな影響をおよぼすことに気づく必要がある」⁷⁹。先述のオープンハイマーの活動は、サバイバーである彼女自身の癒しであり、また他の被害者／サバイバーたちや社会に対して彼女たちの経験から成る知を贈るものと言えるだろう。

クライアントにとって社会運動に参加することは、第一義的には彼女たち自身のエンパワーメントやトラウマからの回復という意味がある。それと同時に、運動に参加することで可視化される彼女たちの経験は、聴き取られることなく不可視化されていた同様の過去の経験や現在の問題に光を当てる。そうして顕在化された様々な傷つきの経験は、セラピストによる支持と政治的な行動との相互作用によって性差別的な社会に対して大きな影響を及ぼし得る。

おわりに

本稿で分析したフェミニスト・セラピーの4つのキー概念は相互に関連する。

77 ハーマン、328頁。

78 前掲註、331頁。

79 ダイアナ・E・H・ラッセル (斎藤学監訳) 『シークレット・トラウマ——少女・女性の人生と近親姦』 (ヘルスワーク協会、2002年)、33頁。

クライアントとセラピストの間に対等な関係がなければ、クライアントたちは自らの問題を安心して語るができない。また対等な関係はセラピストの権力を制するという意味から、クライアントにとってはエンパワメントの役割も果たす。CR 実践に連なるセラピーで、自分の経験を他人に聴いてもらうことや抑圧的でない他人との出会いそのものがエンパワメントになる。これらすべての実践を通した個人の回復や社会との関わり方の変化を「個人的なこと」に止めることなく、性差別を含む抑圧的な社会構造を問い、社会変革を目指すことがフェミニスト・セラピーの本質だと言えよう。

また、4つのキー概念の中で、対等な関係とエンパワメントはソーシャルワークとの繋がりも深い。ソーシャルワークでのそれらに関する議論も包摂しつつ、個人変革と社会変革の議論、そして、あらゆる暴力の根絶へ向けた議論を展開していくことも今後の研究の課題としたい。

合衆国や日本の社会の現状を見渡す際、女性たちの日常に目を向ければ、これらがジェンダー平等な社会だとは到底、言えない。それぞれの社会では男性的な価値観が優位にあり、支配と従属のヒエラルキーは未だに解消されていない。このような社会の構造を変革するためには、その構造を支える手法とは全く異なる方法を取る必要があるだろう。それは社会の周辺にいる人々の生活に光を当て、そのような人々の声を聴くことから始まる。そして、彼女たちの経験の分析から新たな理論を生み出し、それを基に実践を行うという方法である。これはフェミニスト・セラピーがその成立以来、行ってきたことではないだろうか。

フェミニスト・セラピーはフェミニズムと共に歩み、様々な批判を反映し、女性の経験から生み出される知を力にして社会の変革を目指してきた。現在の支配的言説に抗い社会変革を目指すためには、不可視化され、時に汚名を着せられてきた周辺化された人々の声を社会運動や政治的な行動を通して社会へ伝える必要がある。フェミニスト・セラピストの社会運動への参加はこの意味において重要であり、社会運動への参加を重視する理由もここに見出すことができるだろう。また、社会運動にとってもフェミニスト・セラピーとの接続は重要な意味を持つのではないか。社会のより良い変化を目指す社会運動とはいえ、そこに、構造的な男性中心主義が内在し、抑圧的になることがある。フェミニスト・セラピーが社会運動と繋がることによって、社会運動内の男性中心主義の問題の検討へと向かう可能性もある。

ABSTRACT

Historical Overview of the Evolution of Feminist Therapy in the United States and the Significance of Participation in Social Movements

Miki Aikata

This paper explores why feminist therapists emphasize the importance of participation in social movements by first reviewing the historical evolution of the field of feminist therapy, and then identifying the key concepts of feminist therapy.

First, the paper reviews the evolution of the field of feminist therapy in the U.S. focusing on the work by Laura S. Brown, one of the leading feminist therapists in the U.S. Brown explains the field's evolution in the United States by identifying four chronological stages: 1) No-difference feminism (1960s – early 1980s) that features both reformist and radical feminism; 2) Difference/cultural feminism (mid-1980s – mid-1990s); 3) Difference with equal values feminism (mid-1990s – present); 4) Multicultural, global, and postmodern feminisms (the 21st century).

Though useful, Brown's categorization of the evolution of the field of feminist therapy does not offer sufficient insights into the significance of feminist therapists' emphasis on participating in social movements, since it remains vague about the relationship between the political activism of feminism and its meaning in therapy.

This article highlights some key concepts regarding how to resist male domination from a marginalized standpoint through feminist therapy. Those four key concepts are: 1) egalitarian relationship between client and therapist; 2) Consciousness-Raising; 3) empowerment; and 4) the thesis of "the personal is political." These concepts clarify the connection between personal transformation of clients and social change.

Next, the paper further examines the meaning of participation in social movement by feminist therapists, and the importance of participation in social movement for clients. On the one hand, for feminist therapists, taking part in

social movement or political action is crucial because it is a way for them to be in solidarity with the clients as stressed in feminist therapy. On the other hand, for clients, joining in social movement or political action is one of the healing processes in which clients should be able to choose whether to participate or not.

Finally, the paper argues that feminist therapy's four key concepts are interrelated and they show the essence of feminist therapy as well as the rationale behind the emphasis on participating in social movements; that is, to encourage clients to engage in personal transformation that would lead to social transformation. The transformation that feminist therapy aims at is the eradication of sexist oppression in the patriarchal societies where female clients' distress exists. The paper also underscores the importance of advocating for the marginalized through feminist therapists' efforts on the ground. Incorporating the key concepts of feminist therapy into existing social movements can contribute to addressing the problem of male domination within movements influenced by sexist social structure.